

(1) 提案のコンセプト

① 資産名称・概要

○ 名称：ストーンサークル

○ 概要：

縄文時代後期の北海道を含む北日本には、河原石を利用した直径30m以上の環状列石が出現する。秋田県北東部にある鹿角市の大湯環状列石と、北秋田市の伊勢堂岱遺跡の環状列石もこれらの環状列石と期を同じくして造られるようになる。

大湯環状列石には、万座環状列石と野中堂環状列石の二つのストーンサークルがあり、伊勢堂岱遺跡には環状列石A・B・C・Dの四つのストーンサークルが存在する。大湯環状列石は、日時計状遺構といわれる石組遺構などから構成され、周辺には掘立柱建物が巡ることが調査で判明している。また、石組遺構の下からは、土坑墓が確認されストーンサークルがお墓の集合体であること、また各々のストーンサークルの中心部にある立石を結ぶラインは、夏至の際の太陽の沈む方向と一致することもわかってきている。

伊勢堂岱遺跡の4つのストーンサークルは、近接していて、それぞれが30m以上の直径を描いて石が配置されており、これにも土坑墓や掘立柱建物などが伴っている。

両遺跡からは、また数多くの祭祀に伴う遺物も出土していて、これらと供伴する土器からは、このストーンサークルが200年以上にもわたって造られ続け、常に、祭祀の場として縄文人の拠り所となり続けたことがうかがえるのである。

北海道森町の鷲ノ木5遺跡や青森市の小牧野遺跡が一つのストーンサークルであるのに対して、また、鷲ノ木5遺跡の場合が、短期間で造られたというのに対して、大湯環状列石や伊勢堂岱遺跡のストーンサークルの実態は、こうした事実と際だった違いを見せるのである。

ストーンサークルは、葬送儀礼・季節の暦・拠り所として縄文人の精神文化と暮らしに欠くことのできない記念物である。また、他の縄文遺跡が縄文人の生活痕跡を留めるだけであるのに対して、それ自体が、縄文人が見た環状列石とほぼ同じ姿を、われわれ現代人も見ることができるのである。ストーンサークルは、日本の基層文化を作り上げた縄文人の1万年に及ぶ精神構造が昇華した姿であり、私たちが見ることのできる縄文時代の唯一無二のモニュメントなのである。このことから、今後とも大湯環状列石と伊勢堂岱遺跡を世界遺産として保護することが重要である。